

メキシコの日本語教育 — 過渡期としての近年の動向 —

副 島 健 治¹

要旨

メキシコの日本語教育の歴史は苦難の日系人の歴史と重ねることができる。日本語の教育は、基本的に日本人としてのアイデンティティー保持に意味を置く「継承言語としての日本語（母語）」の教育であり、その意味で、日本語教育の主体は日系人であった。今日でも多くの日系の学校が存在している。

メキシコオリンピック（1968年）時の日本語通訳者養成の必要性は、日系人（ハボネス）の「継承言語」から「外国語」としての日本語へと認識を移行させた。現在、各地の大学をはじめとする多くの機関で、日系人を含む多くのメキシコ人が日本語を学んでおり、その数は毎年漸増し続けている。さらに近年、ノンネイティブの日本語教師も育っている。また、本格的な教師の全国的ネットワークも立ち上がり、将来の明るい兆しが見えているが、種々の困難な現状と課題もかかえている。

キーワード：日系人の継承言語から外国語としての日本語へ、ノンネイティブ日本語教師、学習者数の漸増と日本語学習の継続性、JICA・国際交流基金等による人的支援、本格的な日本語教師の全国的ネットワーク

1. はじめに

1. 1 日本・メキシコの関係と日系社会

次は『全墨日系人住所録』（1955年 p. 441）に書かれた編集後記の抜粋である。

事実、祖国の対米宣戦は、西半球屈指の親日国として謳われて来た墨国（＝メキシコ国、筆者注）を、敵の陣営に逐いやり、戦時態勢の名の下に冷厳な法令を布かしめ、米墨の国境及海岸地帯の日系人に、グワダラハラ市と墨都（＝メキシコ・シティー、筆者注）へ、集団強制立退きを命じ、われわれが半世紀に亘つて築きあげた地盤を根こそぎにしてしまったのである。この事は、当国が連盟の一環として執るべき当然の措置であつたにしても、われわれにとつては、移民史上未だ曾つてその前例を見ない練獄であつた。そのため地方在留邦人の分布図は俄然変動を来し、例へばグ市（＝グワダラハラ市、筆者注）と墨都常住の日系人が戦前に数倍した如きである。この世紀の受難は、錦衣帰朝を夢見る所謂一旗族の移民思想に転向を促し、墨国を墳墓の地とする再生の軌道に乗せ、墨国人間に進出の機縁を与へたのは、戦禍の悲劇を生むだ逆効果でもあつた。今日のわれわれからは、最早戦前の如き浮腫者流は払拭され、到るところ何れも強靱な本腰を据えた逞しき再建設に躍進しつゝある群像を見るのである。

ここに記述されているような戦中・戦後の多難な日系人の状況は、いわゆる「複本殖民」（後述）に源をなす今日までのメキシコにおける日系社会、つまりは日系人を中心とする日本語教育の戦後のスタートを取り巻く環境であったことを語っている。それは単純な悲壯感というようなものでは決してなく、いわゆる故郷に錦を飾る凱旋帰国を目的にした出稼ぎ意識から、メキシコ定住の覚悟を決めた強さが内在している。

『日本人メキシコ移住史』（日本人メキシコ移住史編纂委員会：1971年 p. 35）によれば最初の日本人のメキシコへ渡航の記録は1587年とある。1610年には徳川家康の命により田中勝介ら20人が史上初めて日本製の木造船で太平洋を越えており、1614年には伊達政宗の命を受けた支倉六右衛門常長がアカプルコ港に入港した。また1888年に「日墨修好通商条約」を締結しており、これはメキシコがアジアの国と初めて結んだ条約、日本が外国と結んだ最初の平等条約であった。

メキシコは中南米諸国の中で最初に組織的な日本人の移民がなされた国である。それは1897年に南部のチアパス州のアコヤグア村に入植した「榎本移民」で知られる。現在もメキシコ国内には多くの日系人が住んでいるが、ブラジルやペルーの日系人と比較するとその数は少ない²が、現在、日系人団体として日墨協会がまとまりをもっている³。

1. 2 メキシコの日系社会と日本語教育

メキシコにおける日本語教育の原点は、日本人としての自覚と誇りを子弟に受け継いでいくという意味における日系人にとっての「継承言語」としての日本語の教育であった。その最も先駆けといえるのは、アコヤグア村の「アウロラ (暁) 小学校」であろう⁴。そして今日においては「日本メキシコ学院」⁵を挙げることができる。しかし、日本語教育はもはや日系人のアイデンティティーのシンボルとしての「継承言語」教育としてではなく、「外国語としての日本語」が意識され始め今日に至っている。中島 (1998) は日系子女の日本語教育は「母語教育」・「外国語としての日本語教育」・「バイリンガル教育」の接点にあり、三領域にまたがるユニークな方法論の開発の必要性を説いている。このこと自体重要である。しかし、本来が日系人のための日本語教育機関であっても、非日系 (メキシコ人) の学習者が徐々に増えてきているという現実もある。下の表はメキシコで最も歴史のある日系子弟のための学校の1つである「中央学園」⁶の例である。

[中央学園の卒業生に見られる純日系人子弟、日系人子弟、非日系人子弟の割合の変遷]⁷

	1940年代	50年代	60年代	70年代	80年代	90年代
純日系人子弟	100%	93%	91%	85%	56%	26%
日系人子弟	0	7%	7%	12%	29%	44%
非日系人子弟	0	0	2%	3%	15%	30%

(松原佳代1999) よりデータを引いて表を作成

関口伸二 (1994) は中南米の日系人に対する日本語教育を3つの段階に分けられるとし、第一期：「移住一世が二世に読み書きを中心に教えていた時代」、第二期：「学習者に三世や混血児が混じり始めた時期」、第三期：「学習者に三・四世と現地児童が混在し始めた時期」と区分している。そして、第三期においては「日本語学習の意義や学習規律等、教師・父兄・児童三者の価値観は分裂したまま混乱している」と述べている。現在、その第三期にあることは疑いない。今、メキシコにおける日本語教育の価値と意義が問われていると言えよう。

1. 3 メキシコの日本語教育の3つの変容

メキシコにおける日本語教育の始まりは先述のアウロラ小学校に見出せるが、メキシコにおいて日本語教育に大きな変化が起こったのは、通訳養成の必要が強く認識されたメキシコ・オリンピック (1968年) を契機とすると言われていいる。そして、いわゆる日本語ブームが1980年代後半から1990年代初めにかけて起こり、そのころ日本語学習者が爆発的に増加した。それまでは日本語教育機関は首都 (メキシコ・シティ) に集中していたのに対し、それ以降、地方都市の大学にも日本語のコースが設けられるようになっていった。

メキシコにおける日本語教育は徐々に変容してきているが、およそ2000年前後を境としてメキシコの日本語教育界に時代のうねりとしての変化が起きている。本稿の副題に「過渡期」とつけたのは3つの意味がある。一つ目は、前述したように「日系人のための (継承言語としての) 日本語」が「(日系人も含めた) メキシコ人が学習する日本語 (外国語)」へ徐々に移行して来て今日ほぼ定着していること、二つ目は、これまで日本人 (または日本語が堪能な日系人) の教師にはほぼ依存して来た日本語教育であったが、ノンネイティブ日本語教師の存在が徐々に大きくなって来たことである。三つ目は、本格的な日本語教師のネットワークの形成と地方都市における日本語教育の活性化である。それまでは首都圏に存在するいくつかの先駆的な日本語教育機関⁸を中心に形成された任意団体の「メキシコ日本語教師連絡協議会」 (以下「メ日協」とする)⁹が唯一であったのが、日本語教師・機関のネットワーク組織として、2003年に全国規模の公的な「社団法人メキシコ日本語教師会 (AMIJ=Asociación Mexicana del Idioma Japonés A.C.)」として生まれかわった (後述する)¹⁰。また、それとは別にグアダハラハラ市に「グアダハラハラ日本語教師勉強会 (Conferencia de Profesores del Idioma Japonés de Guadalajara)」が2000年に発足 (後述する) しており、首都圏以外の地方都市でも各機

メキシコの日本語教育
一過渡期としての近年の動向

関が連携して弁論大会を開催するなど、独自の活動が活発化している。

2. メキシコにおける日本語教育の近年の動向と課題

2.1 近年の動向

下は、国際交流基金（2003年10月より独立行政法人国際交流基金（ジャパンファウンデーション）、以下「基金」とする）による、メキシコの日本語教育の機関数、日本語教師数、学習者数の調査結果をまとめたものである¹¹。

[メキシコの日本語教育の機関数、日本語教師数、学習者数の推移]

調査年	[初等・中等教育]			[高等教育]			[学校教育以外]			メキシコ全体		
	機関	教師	学習者	機関	教師	学習者	機関	教師	学習者	機関	教師	学習者
1990	1	21	892	3	5	88	4	22	425	8	48	1405
1993	1	22	1500	18	49	1069	10	42	563	29	113	3132
1998	1	35	1200	18	48	1420	29	85	1479	48	168	4099
2003	5	39	1158	20	40	994	35	125	2671	60	204	4823

これから見て取れるように、機関数、教師数、学習者数は年々増加してきている。

日本語教師は48人（1990年）から204人（2003年）に増えている。数字はさておいても、当初、メキシコの日本語教師は日本人あるいは日本語が堪能な日系人がほとんどであったのが、2003年においては約50名のノンネイティブの日本語教師が占めている状況である（後述する）。

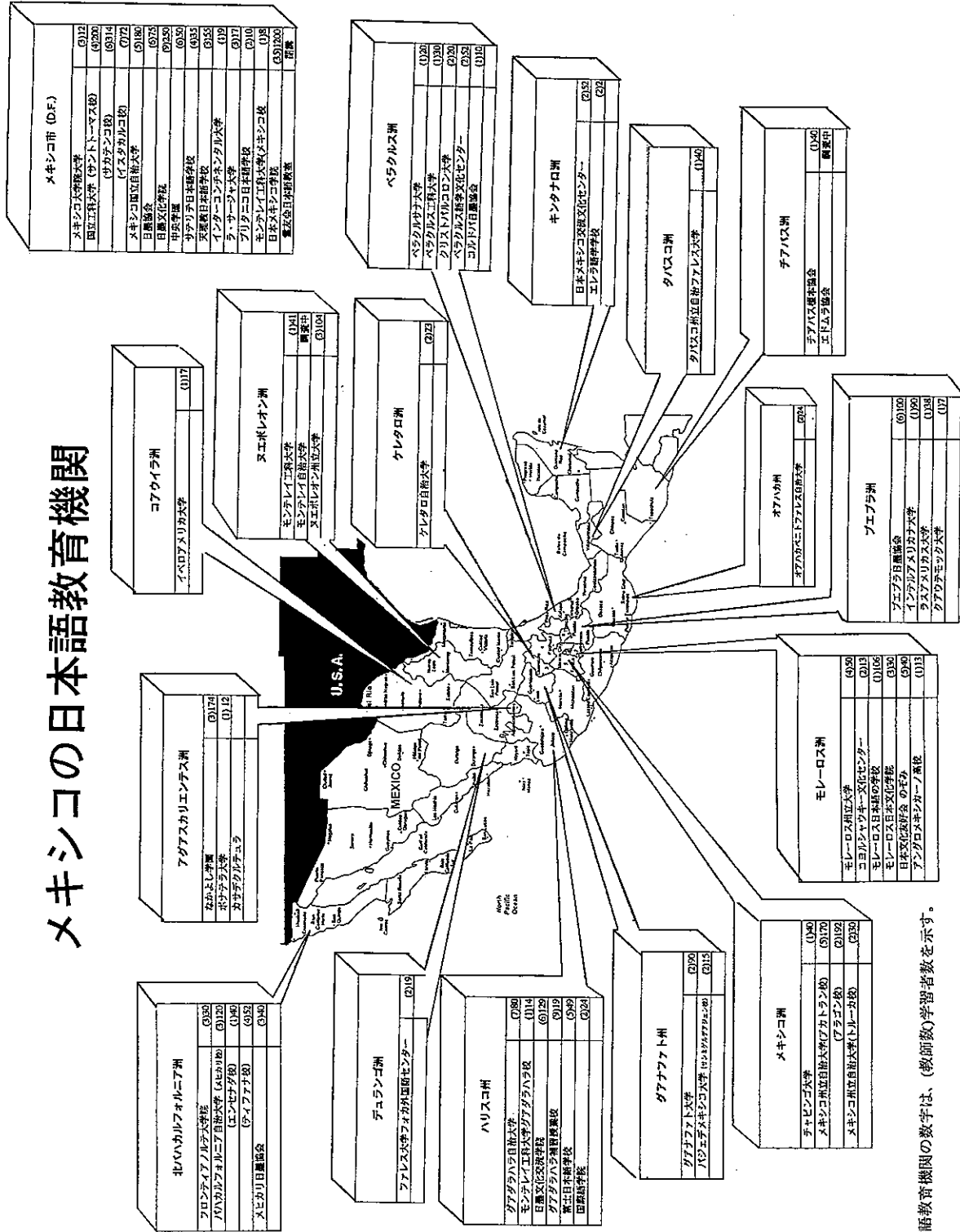
次ページの図は最近のメキシコ国内に数多く点在する日本語教育機関の配置を地図上に示したものである¹²。これによりメキシコ全体の日本語教育機関配置を鳥瞰できる¹³。調査後に新しく日本語コースが設けられたり、逆に閉講（閉校）したものもある。下にその後の動向を補って記す。

[調査（鳥瞰図）以後のメキシコの日本語教育機関の動向（その後明らかになったこと）]

- (1) 北バハカルフォルニア州において、「ティファナ日本人会日本語教室」、「エンセナダ日系協会日本語教室」が開講した。
- (2) 南バハカルフォルニア州に「カルフォルニア州立自治大学ラ・パス校」が開講した。
- (3) アグアスカリエンテス州に存在する日本語教育機関は「なかよし学園」のみである。
- (4) ヌエボレオン州に「調査中」となっているが、モンテレイ自治大学はない。
- (5) ヌエボレオン州に「モンテレイ補習校」があるが、図中に出ていない。
- (6) ハリスコ州の「国際語学院」はない。
- (7) グアナファト州の「バジェ大学（日本語クラス）」は廃止されたが、新たに「グアナファト大学サンミゲル校」と「同レオン校」が開講した。
- (8) メキシコ州に「モンテレイ工科大学Estado De México（メキシコ州）校」が開講した。
- (9) モレロス州の「アングロメキシカーノ高校」はなし。新たに、「モンテレイ工科大学クエルナバカ校」が開講した。
- (10) プエブラ州に「ベネメリタ・プエブラ州立自治大学」、「イベロアメリカ大学」が開講した。
- (11) キンタナロー州の「カンクン工科大学」が開講した。
- (12) 「ベラクルス州立大学ハラッパ校」と「同オリサバ校」で日本語教育が行われている。
- (13) サンルイスポトシ州では「サンルイスポトシ州立大学」が開講した。
- (14) シナロア州の「シナロア州立自治大学」が開講した。
- (15) メキシコDF（メキシコシティ）に「アジア研究学会」ができた。
- (16) ミチヨアカン州モレリア市の「ミチヨアカン・サンニコラス大学」で日本語クラスが開講された。

メキシコの日本語教育の1つの特徴は、1990年代において日本のバブル経済が崩壊したにもかかわらず、日本の経済状況にはあまり影響されず、日本語熱は冷めなかった。反対に徐々にではあるが、学習者数は伸び続けてきたのである。これは1つの大きな特徴としてあげられる。地理的・歴史的にも、そして経済的・政治的にもアメリカ合衆国の大きな影響下にあるメキシコにおいて、第二次世界大戦の敗北にもかかわらず、欧米に引けをとらないほど飛躍的に経済成長した日本という国はメキシコ人の大いなる関心を引くところである。近年においては、他国でもそうであるように、日本の大衆文化、とりわけアニメやマンガは日本語学習の動機に大きな影響を与えている。

メキシコの日本語教育機関



表中の各日本語教育機関の数字は、(教師数)学習者数を示す。

メキシコの日本語教育
—過渡期としての近年の動向—

また、メキシコ北部（特にアメリカ合衆国との国境）を中心として広がる「マキラドーラ」と呼ばれる特区には日系企業も多く、このことも日本語学習を促す要因となっている。

しかし、日本語学習の後、日本語を生かした職に就いたり、一部を除いて¹⁴日本研究への道を歩む者はごく少数であり、個人的な事情で日本語学習の必要に迫られた者を除き、学習動機の大きな基盤は概ね「日本（文化）への関心」といった実利以外のところあると言えるようである。

このようにメキシコにおいて、日本語学習者の持続的な漸増傾向があるのである。しかし、メキシコにおける日本語教育は決して楽観的なものではなく、次に述べる深刻な問題点も指摘できる。

2. 2 近年の状況に見られる課題

2. 2. 1 学習継続率が低い

上述のように、メキシコにおいて日本語学習者は確実に増加してきた。ただし、学習者数の増加の数字も大切だが、もう一つのファクターとして「日本語学習者の学習継続」の状態を探ることも重要である。筆者がメキシコで日本語教育の仕事に携わっていた時、多くの日本語教師諸氏との意見交換の中で分かってきたことであるが、初級コースに入った学生が、学習半ばにして日本語学習を止めてしまうというケースが多く、機関によっては中・上級のコースが設けられていない場合も少なくなかった。下は、メキシコにおける日本語能力試験受験者¹⁵数の推移を示したものである。

[メキシコにおける近年の日本語能力試験受験者数の推移（単位：～人）]

年度	総数	1級	2級	3級	4級	年度	総数	1級	2級	3級	4級
1992年	488	16	52	147	273	1999年	632	17	64	178	375
1993年	437	10	53	126	248	2000年	611	12	72	179	348
1994年	387	15	35	119	218	2001年	733	17	76	207	433
1995年	444	20	57	139	228	2002年	791	19	80	279	413
1996年	545	22	87	141	295	2003年	869	27	82	324	436
1997年	597	14	54	132	397	2004年	879	23	79	311	466
1998年	648	12	56	192	388	（試験会場：メキシコシティー） ¹⁶					

これから明らかなように、受験者数は年々増加しているが、増加しているのはもっぱら初級（3・4級）段階の受験者である。中上級（1・2級）の受験人数は極端に少なく、増加もあまり見られていない。日本語学習があまり続いていない、つまり学習継続率が低いことがうかがわれる。

また、右表はメキシコ州立自治大学トルーカキャンパス外国語教育センターの各言語の教育の実勢である¹⁷。メキシコだけではなく、多くの屈折語や非漢字圏の国や地域における日本語教育でも言えることであるが、日本語はその習得のハードルが学習者の体感として比較的高く、先に学習動機の基盤を「日本（文化）への関心」とあげたが、溢れかえる日本メーカーの製品、日本食、マンガ、アニメ、テレビゲームなどに惹かれて気軽に日本語を勉強し始めても、実は日本文化に対するエキゾティシズム¹⁸と学習の困難さは隣り合わせであることを、学習者は思い知る結果となる。

また、習得後の日本語使用範囲も学習者の生活圏においては限られており、学習継続を鈍らせる一因となっている。一概に他言語の学習者の数と直接比較はできないが、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語などに比べると、日本語は後方に位置するのが現実である。

このように、日本語はメキシコにおいて魅力ある学習言語とはなかなかかなりにくいという側面もある。

2. 3. 2 日本語教師不足

加えて、日本語教師不足も深刻な問題である。日本語学習者の底辺は確実に広がってきており、以前のように、日本

[メキシコ州立自治大学トルーカ・キャンパス
外国語教育センターの言語別集計]

言語	学習者数	教師数 [※]
ドイツ語	145	5(1)
スペイン語 [※]	9	1(1)
フランス語	259	9(0)
イタリア語	64	2(0)
英語	4496	89(0)
日本語	28	2(1)
ラテン語	9	2(0)
ヌワートル語 NUHUATL語	5	1(1)
ポルトガル語	18	1(1)

※ 教師数の()内の数字は、ネイティブ教師

※ スペイン語は外国人のためのコース

語に堪能な日系人（メキシコ人と結婚したりしてメキシコに住むことになったような「一世」を含む）や長期滞在の日本人¹⁹が日本語を教えるというのだけでは日本語教師確保が追いつかないという教師不足の時代が到来しつつある。専門性を持ち訓練された優秀な日本語教師が早急に多数必要とされている²⁰。日本語教師不足という問題には5つの側面がある。

一つ目は、かつての「日本人なら日本語を教えられる」という安易な認識からは脱しているものの、日本語教師雇用の際して、何らかの形でメキシコに在住している日本人を雇用するケースが多い。そのような事情から、採用された日本語教師に対しては日本語および日本語教育の専門性の自覚を促がし、日本語教育の知識と技術をステップアップさせていかなければならないという重要な課題である。

二つ目として、メキシコ国内には、日本語教師として発掘すれば優秀な日系人など、その適任者はいるかもしれないし、日本語教師という仕事自体はたいへんやりがいのある仕事である。にも拘わらず、率直なところ、その待遇面で日本語教師という職業そのものに魅力が薄れてしまっているのが実情である。

三つ目の問題として、近年増加してきたノンネイティブ日本語教師についてである。最近ではメキシコの日本語教師の4人に一人はノンネイティブである。このこと自体は、下に述べるような意味において、歓迎すべき傾向である。しかし現在の状況では、一部を除けば、概してノンネイティブ教師の日本語の運用力が必ずしも高くないということと、日本語教育の知識や技術においても一定のレベルに達していないと言わざるを得ないという現実を、率直に挙げなければならぬ。²¹

従来、メキシコにおける日本語教育はメキシコ・オリンピックを契機に、日本人かまたは日本語運用力の高い日系人によって担われてきた。だが、もはやその段階は終わり、これからは日本語を習得したメキシコ人によって担われるべきであり、そのように徐々になりつつあると言える。メキシコ国内において将来的に日本語教師を確保する道として、ノンネイティブの日本語教師が担う道しかあり得ないであろうと考えられる。このような状況に鑑み、「メ日協」（先述）、「メキシコ日本語教師会」が主催して、ノンネイティブ教師対象の研修会を定期的に開いてきた。また、基金や国際協力事業団（2003年10月より「独立行政法人国際協力機構」、以下「JICA」とする）²²による研修会やシンポジウム、セミナー等もたびたび開かれてきた。

四つ目は、在メキシコ日本人教師についての今後の課題である。メキシコで実施される日本語教育シンポジウム、日本語能力検定試験や日本語弁論大会、子ども話し方大会（日墨協会主催）、研修会・セミナーなどの日本語教育関係のイベント等²³の運営においては、特に日本人教師が中心になり主導的役割を果たしてきた。そのような意味においても日本人教師の存在の意味は大きいと言える。しかし、メキシコにこれからも長く住むという日本人教師は限られており、メキシコの主要な日本語教育機関だけ見ても、日本人教師は2～3年で日本へ帰ってしまうケースが多い。²⁴数年で帰国してしまう日本人教師が重要な役割を果たしてしまっている現状、これが第四の側面である。

最後に、メキシコにおける日本語教育は、いわゆる市中の語学スクールではなく、高等教育機関（大学の「外国語教育センター」など）でなされているケースが非常に多いということが挙げられる。これ自体メキシコの日本語教育の一つの大きな特徴である。一般に大学などの高等教育機関では、一定の学位（概ね修士以上）を取得していることが雇用の条件であることが多いが、メキシコの日本語教師の中で修士以上を取得している者はほんのわずかである²⁵。そのことから学位のある他言語の教師より下位に見られがちで、機関内での日本語教師の待遇や立場を弱くしているように見える。この雇用資格の問題が五つ目の側面である。この問題については、まだプログラムの人数規模は少数であるものの、近年開始されたところの研修者に学位を与える基金のプログラムにわずかな光明が見出せる²⁶。

3. 基金、JICAによるメキシコの日本語教育に対する人的支援について

これまで、基金やJICAによって日本語教育の専門家²⁷やボランティアが派遣されてきた。今後の派遣についてどうなるかは不透明な部分もあるが、今般までの派遣実績の状況を眺めたい。下に示した派遣実績の図表の中の「→」は被派遣者1名分を示し、長さは派遣期間を示している。

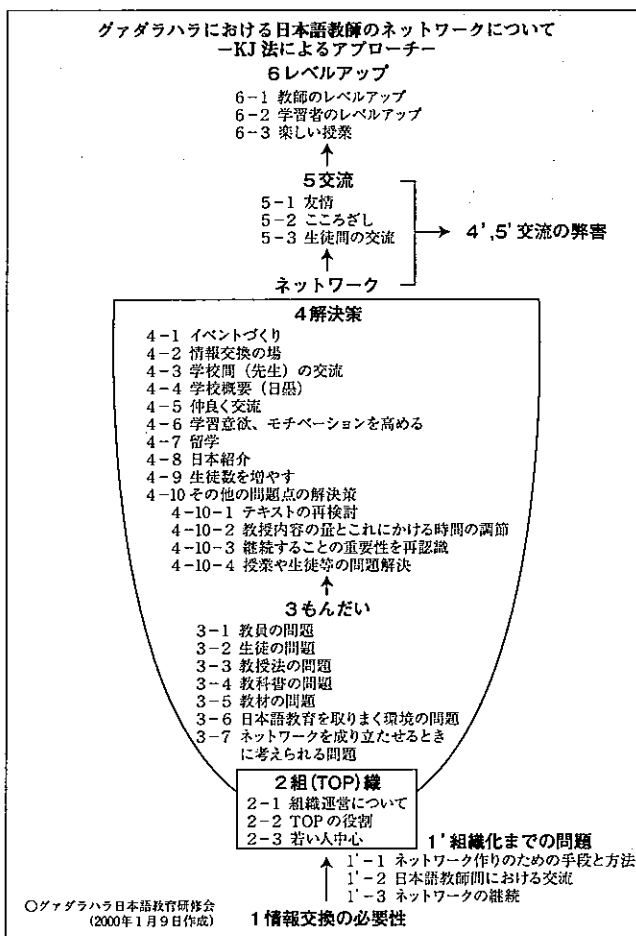
グアダハラ市内の日本語教師が基金メキシコ事務所の呼びかけで参集し、今後のグアダハラ市の日本語教師ネットワークの意義と構築について少なくとも2回の集まりの場を持ち、話し合った³⁵。右はその最終のまとめとして、グアダハラ市の日本語教師ネットワークの必要性についての様々な意見をKJ法によって図式化し集大成したものである（集めた日本語教師全員で作成）。紙面の都合で多くを記述できないが、これがきっかけで、グアダハラ市内の日本語教師の連携の必要性が強く認識され、2000年4月8日（土）「グアダハラ日本語教師勉強会」（Conferencia de Profesores del Idioma Japonés de Guadalajara）が立ち上がった。年に数回の勉強会を開くと同時に学校間の情報交換を行っており、グアダハラ市における日本語教師のネットワークの基軸となっている。

4. 結語—1999年以降の変化と現在および今後の課題—

メキシコにおいて、日本語教師を捉える認識は、「日本人なら誰でも日本語が教えられる」と考えられがちなレベルから、「日本語教師は日本語教育のエキスパートである」と認識されるレベルにもう少しで上がりきろうとしているように見える。そして、徐々にではあるがメキシコ人のノンネイティブ日本語教師が一人立ちし始めている。この大変重要な時期に、公的な日本語教育機関（特にメキシコの地方都市の機関）への支援・テコ入れすることは、大きな成果が期待できるのではないかと思量する。現在、基金からの日本語教育専門家の派遣は2003年を最後に途絶えている。また、JICAによる今後の日本語教師派遣も不透明であり、2007年度以降の派遣は見込めない模様であると聞き及んでいる。

また、メキシコでは、比較的日系の子弟が多く出場する「子ども日本語話し方大会」（JICA支援）と呼ばれる大会³⁶と、「メキシコ日本語弁論大会」（基金支援）と呼ばれる大会がある。今後はこの2つを1つの弁論大会に統合し、「成人の部」、「年少者の部」のような形で運営していくのが望ましい方向ではないかと思量する³⁷。それには2つの大きな理由がある。第一に、日本語教師の研修会や日本語のスピーチ大会など、似ているイベントをJICAと基金からの支援という縦割りで、別々に扱うことは実は非効率的でもあるということである。もう一つは、成人は年少者（子ども）の高い日本語運用能力に驚嘆し、年少者は成人のお手本となる日本語を直接聴くことができる。同時に、日系人と非日系人がお互いの日本語レベルを目の当たりにすることによって相互に刺激し合うということ。聴衆も単純に考えれば、倍の数になるであろう。そもそも、成人・年少者、日系・非日系の学習者が垣根を越えて、一堂に集まり日ごろの成果を披露することは、それ自体意味があり、メキシコにおける日本語学習者は自らの位置づけを認識でき、プライドも持てるのではなかろうかと考える。日本語教師の研修会もJICAと基金が連携すれば、さらに効果的な成果が期待できるはずである。

現在、メキシコで使われている日本語教育の教材は、日本で市販されている教材とメキシコで作成された教材がある。特に後者について言えば、メキシコ人の日本語学習の実情をよく知って作られた大変優れたものがあることに筆者の異論は全くない。ただ、それらの多くが基本的に日本人教師が開発した教材であることに、付け加えれば、ノ



〔ネットワークの必要性についての意見を図式化したもの〕

ンネーティブ教師にとっても使いやすい教科書、副教材の開発が今後必要ではないかと考える。ノンネーティブの教師の視点からの日本語の理解の順を追った整理されたテキストがあれば、なおいっそう便利であると考えられる。

今後のメキシコにおける日本語教育は、メキシコ人の日本語教師を中心としてなされていく時期が必ずや到来し、そのように図ることが肝要であろう。日本人日本語教師の、そのことを念頭に置いた仕事が、今後のメキシコの日本語教育を発展させていくのではないだろうか。

〈おわりに〉

本稿執筆に当たって、国際交流基金メキシコ事務所の亀井芳樹氏に多大な協力をいただいた。深く感謝する。

注

1. 筆者は、1999年4月から2001年3月まで国際交流基金派遣日本語教育専門家としてメキシコに派遣され、国際交流基金メキシコ事務所付日本語教育アドバイザーとして活動した。
2. 日墨協会（メキシコ日系人協会）のHP（下にURLを示す）に、やや古いデータだが、5371人（男2625人：女2746人）とあり、外務省の発表では「約16750名」（下のURL）とある。しかし、「日系人」をどう定義するかによって「日系人」の人数のカウントの仕方も自ずと異なってくる。JICA（国際協力事業団）メキシコ事務所の山口所長（当時）に筆者が口頭で尋ねたところ、その時点で「3万6千人の日系人がおり、3千6百人が日本語を学習して、JICAは12名の青年ボランティアを送っている」との説明であった（1999年5月11日（火）JICAメキシコ事務所にて）。○日墨協会URL:<http://www.kaikan.com.mx/index-jp.htm>
○外務省URL:<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mexico/data.html>
3. 日系人団体はメキシコ・シティーの日墨協会だけでなく全国各地の地方都市に存在する。2年に一度、メキシコの日系人全国大会が行われている。
4. おそらく中南米における本格的な日本語教育がなされた最初の学校と思われる。明治39年（1906年）榎本移民で知られるアカコヤグア村に日墨協働会社の負担で建設され、日系子弟のために日本語とスペイン語の教育がなされた。日本から訓導（教師）を招いて教育を行った。敷地内の宿舎に教師とともに寄宿し、授業は全て日本語で行われた（午前が授業、午後は農作業をしたとある）。教科書はローマ字で表記したものを作成し、単に日本語を教えるのではなく、日墨両国の文化も教えた。一時、州政府直轄の公立学校となったりしたが、その後日墨協働会社解散とともに廃校（1916年）。
5. “社団法人日本メキシコ学院”（LICEO MEXICANO JAPONES, A.C.）は1974年9月の田中首相とエチェベリア大統領との共同声明によって設立が表明され、1977年9月に開校されたメキシコ政府の認可した正式の公教育機関である。特徴は日本コース（小・中学校生徒数142名（2003年11月現在））、とメキシココース（小・中・高校生徒数750名（2003年4月現在））、からなり、前者は日本の文部省（現文部科学省）の教育課程に準拠した教育を行っており、同時にスペイン語、メキシコ文化理解教育を実施している。後者はメキシコ政府教育省の教育課程に準拠した教育を行うとともに日本語および日本文化学習を実施している。メキシコにおいて最も大規模な日本語教育が実施されている機関である。筆者が当校を訪ねてお話を伺ったときの加藤事務局長の話によれば、日本語を教えることも大切だが、バイリンガル教育よりも、ボーダレスの時代において堂々とした真の国際人を育てるバイカルチュラルの教育を目指したいとお話であった。（1999年5月12日（水）筆者訪問）
6. 中央学園は1944年に創立された。この学校の場合、生徒は4歳～16歳までの子どもが対象で、最多年齢層は8歳である。また、日本語だけを教えるのではなく、それ以外に「体育」「歌」「図工」「教室活動」などが科目として設定されている。
7. 「純日系人子弟」は家系の中にメキシコ人との婚姻関係がない子弟、「日系人子弟」は日系の家系の中にメキシコ人との婚姻関係がある子弟、「非日系人子弟」は家系の中に日本人との婚姻関係がない子弟を意味する。
8. 下は首都圏（メキシコ・シティー）における中核的日本語教育機関（機関名、設立年（日本語教育開始年））である。これらはメキシコの日本語教育の牽引力となって、従前からメキシコの日本語教育の主導的役割を果たしてきた。

メキシコの日本語教育
—過渡期としての近年の動向—

[メキシコの日本語教育において中核的先駆的役割を果たしてきた機関（首都圏）]

主要機関名	日本語教育開始年
中央学園	1944年
エル・コレヒオ・デ・メヒコ（大学院大学） アジア・アフリカ研究センター	1964年
メキシコ国立自治大学外国語センター	1967年
日墨文化学院（二世協会）	1968年
国立工科大学（ポリテクニコ）外国語センター	1975年
日メキシコ学院（リセオ）	1977年
日墨協会日本語教育センター	1991年

また近年においては、グアダラハラ自治大学、モンテレイ工科大学、ベラクルス大学、ベラクルス工科大学、グアナファト大学、なかよし学園、バハ・カリフォルニア大学など、地方都市にある日本語教育機関の存在感も急速に大きくなってきている。

9. 1989年設立。その幹部の方たちは首都メキシコシティにある主要な日本語教育機関のメキシコでの日本語教育経験の長い日本人が主であった。
10. 2001年に準備委員会が発足し、2003年7月に正式にメキシコ政府の法人格を取得した。
メキシコ日本語教師会のURL:<http://www.kyoushikai.org/>
11. 『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・1990、93、98、2003』（国際交流金日本語国際センター、1992、94、2000、2005）より。調査回答を得られなかったものも入れると、実勢はこれよりもやや多くなるものと思われる。
12. 名称や表記について訂正すべき部分があったので2点示す。（1）図中の「メキシコ州」に「メキシコ州立大学（アカトラン校）」「同（アラゴン校）」とあるが、これは"UNAM"であり、日本語表記は「国立自治大学」である。（2）「ベラクルス州」に「ベラクルサナ大学」と見えるが、日本語表記は「ベラクルス州立大学」である。
13. これは筆者らの調査をもとに、2001年時点で亀井芳樹氏（基金メキシコ事務所）が作成したものである。
14. エル・コレヒオ・デ・メヒコ（メキシコ大学院大学）のアジア・アフリカ研究センター（修士課程）においては日本語は日本研究科の必須科目となっている。
15. メキシコにおける日本語能力試験の結果の分析（日系と非日系）が次に詳しく報告されている。
○AMIJサイト http://www.kyoushikai.org/0305jlpt_hara.pdf
16. 試験会場として米国のロスアンジェルス会場で受験する者（メキシコ北部の学習者）もいるが、その分はここにカウントされていない。
17. メキシコ州立自治大学トルーカキャンパス外国語教育センター（Universidad Autónoma del Estado de México, Centro de Enseñanza de Lengua :C.E.L de Toluca）において、センター長のエミリオ氏（C.D. Emilio Tello Baca）に面談したときの口述を筆記し記録したものである（1999年8月18日、筆者訪問）。
18. 「エキゾティズム（exoticism）」は「異国情緒」「異国趣味」とも訳され、文化人類学や社会学など学術的・専門的な意味においては19世紀末ごろのヨーロッパに見られたような（植民地）支配を背景にした権力的立場から主にアジア、アフリカ諸国に対するまなごしを指していることがある。しかし、ここでは一般的な意味における自文化にない異国の文化の文物や雰囲気に対して惹かれる気持ち、興味・関心というような意味で使用する。
19. 日本の政府関係機関職員や企業駐在員の配偶者、日本人留学生、基金やJICA派遣の日本語教師などの他、日本からメキシコの日本語教育機関に直接雇用された人もいようである。いずれにしても、このような日本人教師は少数を除いて、数年働いた後いずれ日本に帰ってしまう。
20. 粟飯原（1995年p 80）は「いわゆる素人が日本語を教えはじめる」と述懐している。
21. もちろん、非常に日本語運用能力が高いバイリンガルのノンネイティブの日本語の先生方もたくさんおられることは言うまでもない。
22. 2003年10月、JICAは「独立行政法人国際協力機構」となった。
23. 国際交流基金、JICA、JETRO（＝日本貿易振興会）、在メキシコ日本大使館（文化部）等々が主催・共催・後援などの形でバックアップしている。

24. 「若い日本人の先生方はやっとメキシコの日本語教育に慣れたところで日本へ帰ってしまう。また新しい先生が来たらゼロから仕込まなければならない」と或る学校の日本語科の責任者が嘆息していた。
25. メキシコ国内で日本語教師はそう簡単には見つからないことから、特例的に学位のない教師が大学で教えているのが現状といえる。
26. 基金日本語国際センターで、日本語教育指導者養成プログラム（修士コース）が2001年度より、日本言語文化研究プログラム（博士課程）が2003年度より開始された。これは現職日本語教師又は日本語教授経験者を対象に1年間で修士課程、3年間で博士課程を修了し、各国における日本語教育指導者養成を目的とするプログラムである。学位が出せる本プログラムは日本語国際センター、政策研究大学院大学および国立国語研究所の3者連携のプログラムである。
27. 1972年から継続していた基金によるメキシコへの日本語教育専門家の派遣については縮小傾向にあり、2003年7月以降は派遣が途絶えている。
28. 特に、メキシコ二世協会日本語学院（現・日墨文化学院）は、基金、JICAともに重要性の認識が強く、両者からの派遣が続いていた。
29. 『国際交流基金25年間の事業実績』（2000年）を参考に作成。日本語教育以外の諸分野（日本研究、武道など）で派遣された専門家は除外した。
30. 日本語教育以外の諸分野（「団体事務」「養護教師」「看護士」「秘書」「編集員」など）の職種のもの除いた。ただし、「幼稚園教諭」「児童教育」「文化活動」の職種は、実質的に日本語教育の要素が強いため含めた。
31. 「メキシコ日本語教師会」は、既存の教師会であった「メキシコ日本語教師連絡協議会」（＝「メ日協」）の活動を改め、全国規模での教師ネットワーク形成を図ることをめざして再編成された組織であり、国内に約100名の会員がいる、と基金ホームページで紹介されている。

○基金URL:<http://www.jpf.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/2003/mexico.html>

主な活動として、毎年海外からも講師を招聘して行われる「日本語教育シンポジウム」やメキシコ人日本語教師を対象とした「日本語ブラッシュアップ講座」、「日本語弁論大会」等に加え、教師会のホームページを開設し教師間の情報交換を行っている。
32. メキシコ第2の都市グアダハラ市にある4機関で組織されている。「グアダハラ日本語教師勉強会」は、年に3回の「勉強会」（研究・研修会）を開催している。
33. ベラクルス州立大学言語学部外国語学科の黒崎充氏が下に報告している。

○AMIJサイト http://www.kyoushikai.org/hokoku/2003-12-12_oratoriaveracruz1.html
34. その他に、「富士日本語学校」「国際語学院」という名前の機関があったが、筆者は詳細を承知していない。しかし研修会には「富士日本語学校」の経営者（メキシコ人）の方の参加を見た。
35. 第1回：1999年12月11日（土）グアダハラ自治大学にて。第2回：2000年1月9日（日）モンテレイ工科大学グアダハラ校にて、研修会という形式で会合を持った。
36. 一点付記しなければならない。「子ども日本語話し方大会」は2004年度よりJICAの予算削減によって、公の大会としては実施されなくなった。現在は、「日本語合同研修会」の中で時間を取って行われる「子供の話し方の発表会」という縮小した形になっている。
37. 実際にペルーなどではそのように行っている。

メキシコの日本語教育
—過渡期としての近年の動向—

引用文献・資料

- 粟飯原淑恵. 1995. 「メキシコにおける日本語教育の現状と課題」『世界の日本語教育〈日本語教育事情報告編〉』第2号：pp. 79-83
国際交流基金日本語国際センター.
- 岩沢正子. 1984. 「メキシコにおける年少者の日本語教育」『日本語教育』53号：pp. 41-46. 日本語教育学会.
- 上野久. 1994. 『メキシコ植民地』中央公論社.
- 海外日系人協会編. 1989. 『第30回海外日系人大会記念事業 海外日系社会に関する国際シンポジウム 日本語教育活性化についての報告書』(海外日系人協会).
- 木村静子. 1984. 「メキシコにおける日本語教育 —成人教育の場合—」『日本語教育』53号：pp. 21-33. 日本語教育学会.
国際交流基金日本語国際センター. 1993. 『日本語国際センター国際懇談会第5回会議議事録』国際交流基金日本語国際センター.
———. 2000. 『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・1998年概要』国際交流基金日本語国際センター.
国際交流基金企画部地域課. 2000. 『国別文化事情報告 2000』国際交流基金企画部地域課.
国際交流基金サン・パウロ日本文化センター. 1998. 『南米における日本語公教育に関する調査報告書』国際交流基金サン・パウロ
日本文化センター.
国際文化交流推進協会(エースジャパン). 2000. CD-ROM『国際交流基金25年間の事業実績 昭和47年(1972)～平成8年
(1996)』国際交流基金.
- 関口貞司. 出版年不詳(1993年か、「あとがき」の日付より). 『日墨協会と私』出版社不明(個人出版か).
- 関口伸治. 1994. 『メキシコの日本語教育』メキシコ日本語教育センター.
- 関正昭. 1997. 『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク.
- 関正昭ほか編. 1997. 『日本語教育史』アルク
- 副島健治. 2000. 「日本語教育専門家 1999年度 年次報告書」国際交流基金日本語課(現派遣課)保管.
———. 2001. 「日本語教育専門家 総合報告書」国際交流基金日本語課(現派遣課)保管.
- 角山幸洋. 1986. 『植民地武揚とメキシコ植民移住』同文館出版.
- 当舎勝次編. 1955. 『LOS JAPONESES RESIDENTES EN LA REPUBLICA MEXICANA Y SUS DESCENDENTES 1955 (全日日系人
住所録)』発行所：水幸夫商店.
- 直井恵理子. 1984. 「メキシコ国立自治大学における日本語教育」『日本語教育』53号：pp. 34-40. 日本語教育学会.
- 中島和子. 1988. 「日系子女の日本語教育」『日本語教育』66号：pp. 137-150. 日本語教育学会.
- 日本人メキシコ移住史編纂委員会. 1971. 『日本人メキシコ移住史』日本人メキシコ移住史編纂委員会.
- 毎日新聞社編. 1987. 『日本メキシコ学院十年の歩み』毎日新聞社.
- なかよし幼稚園・なかよし学園. 2000. 『なかよし幼稚園・なかよし学園 ご案内』手作り冊子.
- 松原佳代. 1999. 「日系人日本語教育のさまがわり—メキシコ市中央学園の場合—」. 中央学園報告資料.
- MARÍA ELENA OTA MISHIMA. 1982. 『SIETE MIGRACIONES JAPONESAS EN MÉXICO 1890-1978』EL COLEGIO DE MÉXICO.
メキシコ日本語教師会準備委員会(COMITÉ DE PREPARACIÓN DE LA ORGANIZACIÓN DE PROFESORES DEL IDIOMA JAPONÉS
EN MÉXICO). 2002. 「メキシコ日本語教師会準備委員会報告書(REPORTE DEL COMITÉ DE PREPARACIÓN)」.
右のサイトに公開. ○AMIJサイト <http://www.kyoushikai.org/hokoku/020216.doc>
- 山下暁美. 1991. 「中南米の日本語教育の歴史 —ペルー, ボリビア, チリ, ウルグアイ, ブラジル, メキシコ—」『講座 日本語
教育』第26分冊：pp. 156-206. 早稲田大学日本語研究教育センター.

